

私の京都新聞評

インターネットが普及してから20年経ち、現在、ネット上には60兆ものウェブページが存在するという。何でもスマホで検索するという所作の蓄積が、人工知能を賢くさせ、その結果、われわれの生活はどのようなものになるのか、予想もつかぬ。今であるが、批評を依頼され、この1カ月ほど自覚的に読んでみると、新聞というメディアには、まだまだ可能性があるとつくよく感じた。

11月29日から12月2日にかけて地



域・総合面などで4回にわたって掲載された、北陸新幹線の大阪延伸をめぐる「論点を聞く」は、いずれも中身の濃い、じっくり読み込む価値のある記事だった。

このトピックについて、これだけまとまった情報をネットで集めるのはかなり大変である。それだけでも、このような特集の意義はとても大きいと言えよう。

4名の専門家による各ルートの費用対効果をめぐる分析や、中長期的

視野に立った様々な指摘は、この問題を、決して目先の利益だけで考えなくてはならないということ、私たちに教えてくれている。

しかし、難点もある。せつかく4回ある記事間の連関性が、読み取りにくいのだ。4名の記者が同じ方針や質問をもって取材をする必要はないと思うが、それならそれで、編集の手腕がもっと振るわれてもよいのではない。

専門家と市民の架け橋となることに期待する、重要な使命である。自

読者に伝わる編集の工夫を

戒の念も込めてであるが、責任ある編集が、勇気を持ってなされるべきではないかと思う。

12月1日から社会面で3回掲載された「大人の条件第6部は、今年、投票年齢が18歳に引き下げられたのを機に組まれた特集で、10代の若者たちが直面する現実を、丁寧な筆致で描き出す。細かなディテールを可能な限り書き込みつつ、注意深く切り型を避けながら綴られた文章は、読んでいても心地よい。

そして、「大人って何？」という、われわれ大人たちに向かって開かれ

た問いかけを以って、連載は閉じられている。この問いかけは、とてもなく重い。

19歳の春、京都で下宿生活を始めるにあたって、私は生まれて初めて自分で新聞を購読した。

その頃、ある映画監督が紙面批評を担当していた。うろ覚えであるが、彼は、自分がまだ若かった頃、世情があまりにも暗く絶望的なので、新聞の天気予報の欄を眺めることだけが心の支えだった、といったようなことを書いていた。

当時、自分はそこまで感傷的では

ないなど、軽い気持ちで思った記憶があるが、49歳になった今、彼の書いていたことが、少しわかるような気もする。

私は大人になったのだろうか。この問いを抱えながら、半年間、紙面と対峙してみたいと思う。

(大隅書店代表)

大隅さんの担当は全6回。次回は1月22日に掲載します。

おすみ・なおと 1967年北海道生まれ。京都大文学部卒。出版社勤務を経て、2010年に大隅書店を創業。大津市在住。

2017.1.22

大隅 直人

私の京都新聞評

私は札幌で生まれ、東京で育ち、

大学入学時に京都に越して来た。

以後20年間京都市内に住み、現在は大津市内で暮らしているが、今も東京出張の折には「京都は良い所ですよ」とよく言われる。

1月3日朝刊6、7面に掲載された新春座談会「文化のチカラ」では、京都に拠点を置きながら伝統文化ではなく現代文化の担い手として全国的に活躍する4氏が、京都について、それぞれに思うところを自由に語り合っている。



4氏ともに、京都の悪い所ではなく、良い所の方を、あくまでもポジティブに捉えていて、とても面白く読めた。

さらに、最後に「あえて苦言を」という形で、それだけではない微妙なニュアンスも聞き出すなど、風通しの良い好企画だと感じた。

願わくは、まだこの4氏ほどには有名でなく、彼らよりもさらに若く、さまざまなチャレンジャーをしている人たちと地域のかかわりについて、今後も丁寧な報じてもら

えればと思う。

1月3日から9日まで7回にわたって(滋賀)地域面に掲載された「淡海にかけの橋」は、「ママたちと地域」「生産者と消費者」「湖魚と若者」といった切り口で、地域に根ざしながら、より広い場所とのつながりを志向する滋賀県内各所の動きを、バランスよく取り上げていた。

いずれの回も、伝えたいことが明瞭であり、添えられた写真も良く、楽しく読むことができた。とはいえ、ふだん京都新聞を読

地方の現実 率直に語って

んでいて、物足りなさを感じるところがないわけではない。

端的に言って、地域面に掲載される記事はベタなものが多い一方で、紙面全般、特に大局的な記事

において、滋賀は「京滋」という言葉で括られてしまっ、深く語られることが少ないように思われるのだ。そこでは、三方良しとか、滋賀に固有の(京都とは違った)魅力といった言葉が決まり文句のようにくりかえし使われる。

私としては、その中間ぐらいの記事を、もっと読みたいと思う。

人はなぜ本を読むのか。

なにか困ったとき、答えを与えてくれる本がある。

その一方で、答えではなく、問いを授けてくれる本もある。

人は、自分でもなんとなく理解しかけていることを、自分よりもよく考えている人、よく知っている人の助けを借りて言語化できたとき、問いを明確なものとして立てることができたとき、腑に落ち、行動を起こすことができる。

新聞は事実を丹念に集めたものであるべきであるのと同時に、と

きには言いにくいことや口に出すのがためらわれるような言葉を扱うことも、ジャーナリストの大切な仕事なのではないかと思う。

地方の時代と言われて久しいが、地域の現実について、率直に語る言葉が決定的に不足しているように、私には思われる。

こういう時代だからこそ、地方紙にこそ、できることがたくさんあるのではないだろうか。

(大隅書店代表)

次回の大隅さんの評は2月26日に掲載します。

大隅 直人

私の京都新聞評

小学6年生の頃、新聞の切り抜きを学校に持参し解説せよという課題が出されたことがあった。

私は、両親に連れられて会いに行ったこともある上野動物園のパンダ、ランランの死を報じる記事を選び、感謝と哀悼の気持ちに、平和外交への願いを添えて、そのない発表をした。

しかし、その時、準備しながらあらためて思い知らされたのは、この世界では、小学生の自分には



まったく手に負えないような奇々怪々なことが、時々刻々と起こっているということだった。

1月27日にトランプ大統領が発した入国禁止の大統領令をめぐる、同日朝刊には、1面の「シリア難民受け入れ禁止」というトップ記事だけでなく、総合面、国際面、政治面、経済面に、多岐にわたる関連記事が掲載された。

その後、2月に入ってからも、世界に与える影響や、アメリカの司法との攻防などが、連日詳細に

報じられている。

米国に限らず排外主義の台頭につよい懸念を覚えるが、それがとくに私たちの生活に影響を与える点について、できるだけ多角的に、さらにそれらの点と点がつながるよう、十全な報道を期待したい。

同じく1月27日朝刊1面に掲載された「旧宮家の皇籍復帰も」という記事は、その前日の国会での、野党からの質問に対する安倍首相の答弁について報じていた。

しかし、気になったことがある。記事中に、首相の「男系継承が

といった項目を読むと、正確さについては留保した上で、およそのことは把握できるが、このニュー

スには、日本社会の行く末にかかわる、きわめて本質的な問いが潜んでいると、私には思われる。

ちなみに、同日朝刊2面に掲載された関連記事は、旧宮家(旧皇族)について解説したものであり、翌日以降、続報はなかった。

広さの限られた紙面で、世界の全体を描き出すことは不可能である。

しかし書き手の努力によって、

多角的にわかりやすく

古来例外なく維持されてきたことの重みなどを踏まえつつ」という言葉が引用されているのであるが、この記事を読むだけでは、そもそも男系継承とは何ぞやということが、まったくわからないのだ。

私は、公教育の場で、日本史上、女性天皇(女帝)が存在したことを教わった。しかし、不真面目な学生だったがゆえにか、男系継承という原則については、きちんと学んだ記憶がない。

この件については、たとえば、ウィキペディアで「女性天皇」「女系天皇」「皇位継承問題(平成)」

通信社の配信記事を使っている場合でも、京都新聞として、読者にわかりやすいように加筆、修正するか、用語解説を別途つけるなどの工夫ができるのではないか。

部分の中に全体を表現することは、決して不可能ではないはずだ。だからこそ、あくまでも質の高い記事を期待したい。

これは、本という、かつてほどには読まれなくなっているものを作っている自分に返ってくる問いかけでもある。(大隅書店代表)

次回の大隅さんの評は3月26日に掲載します。

大隅 直人

私の京都新聞 評

少し前のこと。インターネットは紙メディアにデメリットのみをもたらすものではなく、新時代には、紙メディアとネットの共存共栄が可能になるのではないかと、いう趣旨の投書が本紙「窓」欄に掲載されていた。投稿者は16歳の高校生だった。

3月6、7日の文化面に掲載された「投稿サイト発新文学」は、小説投稿サイトで公開された作品が、一般読者選ばれ、支持を受けることで、書籍化のきっかけを



つかみ、そこからベストセラーが相次いで生まれているという昨今の事情について紹介しており、面白く読めた。

双方向性というウェブの強みと集合知のパワーが、一部出版社や文壇が特権的に仕切っていた文学の世界に風穴を開けつつあるということは、痛快至極である。

けれども、この記事に少々物足りぬものも感じた。「書籍化」の値打ちについて、ツツコミが甘いように感じられたからである。

なにより本が売れることは大事である。だが、書物の文化を刷新するためには、版元や編集者が媒介することの意味についてもっと吟味することが必要はずだ。

冒頭で触れた投書で、くだんの高校生は「インターネットという身近な存在を通じ、ニュースに関心をもっと持つてもらおう」ことの可能性を挙げていたが、たとえば新聞のニュースとネット上の膨大な言説との間に、有意義なコラボレーションが生まれる余地はあるのか。私は十分あると考える。

配信拡充、ネットと共存を

3月1日から3日にかけて朝刊社会面に連載された「監視社会の靴音」は、南丹市美山町に住む尺八演奏家ウベ・ワルターさんの個人史をまとめたものだが、旧東ドイツ生まれのワルターさんの激動の物語によって、民主主義の普遍的な価値を捉え直すだけでなく、現在の世界、最近の日本の状況にも思いを至らせる、示唆深いものとなっており、記者の力量をつよく感じた。

ところで、すでにネット上に無料で配信されているような速報性の高い記事ではなく、こういった

プロのジャーナリストにしか書けないような文章が、ネット上でも、もっと気軽に読まれるような仕組みを作ることはできないものか。

調べてみたところ、京都新聞にも会員制のデータベースのサービスがあることが判明した。しかし、その使用料は個人が気軽に払える額ではないし、最近流行りのニュースサイトが備えているようなコメント機能などもなさそうだ。

兎角インターネットは難しい。3月13日朝刊社会面に掲載された「SNSの中傷 若者脅かす」と

いう記事が報じているように、インターネットの特性が生み出す危険や弊害は厳然として存在する。

しかし、同8日の暮らし面に掲載された「他者の肯定が人を伸ばす」という記事は、記事のタイトルでSNSについて触れた上で、日常でできるコミュニケーションの工夫について、ひらたく書いていくところに好感を覚えた。こういった地道な営為の積み重ねが、わたしたちの未来を明るくすることを目指したい。(大隅書店代表)

次回の大隅さんの評は4月23日に掲載します。

大隅 直人

私の京都新聞評

毎年この季節になると「4月は残酷極まる月だ」(西脇順三郎訳)というT・S・エリオットの詩句を思い出す。

3月25日から27日にかけて朝刊1面に掲載された「新 文化庁のゆくえ」は、文化庁の京都移転という計画の背景には、様々な思惑の相違や、足並みの乱れなどがあり、その前途が多難であることが多角的かつ詳細に書かれており、現時点では、手放して喜んだり無邪気に楽しみにしたりできないと



いうことが、よくわかった。26日の記事で紹介されている移転のきっかけを作ったとされる河合隼雄氏の発想と、それを引き継ぐ寺脇研氏の言葉は、4月3日の朝刊に掲載された赤坂憲雄氏と佐々木雅幸氏の対談とも呼応しており、その記事の小見出しにあるように「京都中心の思考を脱皮して『革命』を」という覚悟が肝要であると私なりに理解した。4月4日の文化面では、文化庁移転をめぐるて開かれた催しについて報告する

記事の中で、英国人企業家で二条城特別顧問のデービッド・アトキンソン氏による日本の伝統文化にかんする厳しい指摘が紹介されていたが、なにより具体的なエピソードに基いて語られている点で非常に示唆に富んでおり、同氏の真剣な思いと愛情を受け取ることができた。その他の記事も含めて、現実を直視しつつも、おそろく日本に行く末に大きくかわるこの事業につき、京都新聞として、希望と確信をもって報じようとしていることがよくわかり、心強く感

初志貫き文化庁報道を

じた。初志を忘れず、報道の力によって、今後も継続的に世論をリードすることを期待したい。

エリオットが表現したように、死と再生、過去と未来の対比が際立つ春には、たしかに残酷なところがある。しかし普通に考えれば、春は、さまざまな植物が芽吹き、胸がふくらむ季節だ。

4月3日から新連載「いいいしんじ訳 源氏物語」が始まった。「今の京都の人がしゃべっているように」訳されているとのことで、私のような者にとっては素直に楽

しめる好企画だ。30年前、大学に入学した頃の頃、関西出身の同級生が伊勢物語の原文を関西アクセントで音読してくれて、「わかりやすいやろ」と問われて、つよく衝撃を受けたことがある。彼は優しい男で、しばらく経ってから今度は漱石の文章を持って来て東京アクセントで読んでくれと私に頼み、江戸っ子でもなんでもない私の下手な朗読を感心しながら聴き、私のことを励ましてくれた。そんなたわいのないことも思い出した。心待ちにしていると言えば、ジ

ユニア面に掲載される「ソフィアがやってきた!」も、毎回楽しく読んでいます。4月2日の回はデザイナーの服部滋樹氏、9日は歌手の松田美緒氏だったが、多彩なゲストが小学生を相手に自分がかっている仕事のいちばん大切なことを教え伝えるという設定は、50歳のおっさんにとってもちょうど具合が良い。まだまだ知らないことだらけだし、いろいろな人やものと出会いたい。(大隅書店代表) 次回の大隅さんの評は5月28日に掲載します。

私の京都新聞評

大隅 直人

4月28日の文化面に掲載された「小説投稿サイトから相次ぐヒット作」という記事を読み始めて、私はすぐに姿勢を正した。というのも、この記事は、3月に掲載された本欄でも少々批判的に言及した「投稿サイト発新文学」の続報にあたるものだったからだ。大塚英志氏に話を聞く形で、ネットの登場と近代文学の変容という大きなパスペクティブ（視野）のもとに、議論がより深められていた。



後半で、長引く出版不況で経費節減を優先するため版元の仕事の水準が落ちていることが指摘されており、その点については、素直に認めざるをえない。貧すれば鈍す、である。しかし、以前の記事と併せて読み返すと、ウェブの可能性について再認識させられ、己の視野狭窄（せうさく）に気づかされ、顔を上げて前を向くよう促されているような心持ちになった。記者に深く感謝したい。

京都でADI国際会議が開かれ

たこと関連して、4月下旬から認知症をめぐる記事が多数掲載された。4月30日の社会面では、「届け私たちの思い」と題し、同会議の閉会を報じるとともに、当事者たちによる講演を抄録していた。そのなかの「周囲に1人は変なことを言ってくる人はいても、99人は助けてくれる」という言葉の明るさ、社会というものを信じる心のつよさに、胸を打たれる思いがした。また「支援側は『サポート』ではなく、水平な『パートナー』になって」という呼びかけの

社会の木鐸であり続けて

を迎えた日本国憲法に関する記事が多く見られたが、なかでも5月1日から3日にかけて朝刊1面に掲載された「錦の御旗」と憲法は、本紙ならではの言いようのない切り口の、読み応えのあるものだった。時局は刻々と変化する一方で、五十年、百年、千年の尺度でしか変わらないこともある。歴史を学ぶことによって、私たちは、変わりゆくものと変わらなれないものの関係を、さらには、変わらぬものはなにかということをしは知ることができる。京都を

言葉も紹介されていたが、認知症について、正しい理解を広めるとともに、地域で支えていけるように社会を作り変えてゆくためにも、新聞のはたすべき役割は大きいと感じた。会議終了後も5月4日から4回、地域総合面で「ADI京都会議から」という特集が組まれたが、最終回の「この超高齢化日本で「あすの私」をどう支えるか。そう考えるところから始めるしかない。認知症当事者は、その水先案内人なのだ」という締め言葉をもここに転記しておきたい。

5月に入ってから、施行70年

舞台上に天皇制と戦争と平和をめぐるって繰り広げられてきた歴史をわかりやすく教えてくれる、このような連載の意義は大きいと思う。5月3日の社会面には、シルズの元メンバー諏訪原健氏のインタビューが掲載されていた。たとえ1年前のことであっても簡単に忘却してしまうほどに世の中は加速しているが、だからこそ、新聞には、言葉の力、記事の蓄積をもって、社会の木鐸（ぼく）であり続けて欲しいと切に願う。（大隅書店代表）

大隅さんの評は今回で終わります。